

——結婚難民——

「こがねむし」



米谷義子

狭い1Kの部屋のドアを開けるといくら涼しい風が入ってきた。玄関越しに左側に広がる空間を見上げると、澄みきったスカイブルーに絹層雲が高いところで浮かんでいる。大きなハケで勢いよく描いた様な大胆で繊細な模様が白く表われていた。いつまでも蒸し暑い夏だったがもう秋なのだ。

ドアは何かをはさんでおかないと、バネのように力強く戻って大きな音を立てて閉ってしまうので、ハルオのデカイスニーカーを一個はさんだ。良い風が入るからといってドアを大きく開けておくことはためられた。L字型になった踊り場の右隣りには卒業生のゆかりちゃんがいる。そもそもゆかりちゃんと飲んだことがきっかけで、彼女の隣りに住むことになったのだが、かつての教え子とは言えずさすがに週末に男を連れ込んでいるのがバレるのはばつが悪いし、いい年をして恥ずかしい気がするからだ。

細くて長いささやかなドアの透き間から、床に目を落とすと、小さな緑色の虫が転がっているのが見えた。ゴミを捨てに行くのに小さな虫をふんづけてしまっても嫌な気持ちになるだろうと、虫をつまんで手の平にのせた。長さが二センチ程で、色は深いサップグリーンをメタリックにした感じだ。光にあたる部分は黄金に見えた。殆んど動かず、死んでいると思った。子どもの頃から、セミの抜けがらであっても大事に持ち帰って雑多な勉強机の上にある箱に入れていたくらいだから、死んでいようが、生きていようが、見つけた虫が宝物みたいにみえるから不思議だ。五十八歳になってしまった今でも。

宝物を手の平に乗せて、部屋の中にいたハルオに見せた。

「ねえねえ、みてみて、こがねむしだよ。かわいいでしょ？　きれいじゃない？」  
ハルオは部屋の七、八割をしめる、敷きっぱなしの布団のタオルシートの上を粘着シートの付いたローラーでひたすらコロコロしている。粘着シートはタマミの髪の毛やら、いつかこぼしたせんべいのかげらや、服についた埃をヌチャヌチャとからめ取っていた。ハルオはそれを嫌々やっているわけではない。タマミがほんの少し家事に精を出し始めると自然に協力してくれる。苦では無い様に見受けられる。わざわざやってくれるとかではなく、彼は本当に家事が好きなのだ。

タマミの手の平の小さな虫を見てハルオが言った。

「ん、だよー、こんな虫捨てちゃいなよ。こがねむしなんかじゃないよ。これ何と  
か言う、クソな虫だよ」

「だっ、だめ、捨てるなんて出来ない。これ絵にするもん。モチーフだもん。だめっ」  
タマミは必死にこがねむしを守った。

（あーあ、ハルオに見せなきゃ良かった）。タマミはハルオに虫を見せた事を少し後悔した。彼は手にピンク色の小さなチラシを持っていてその中にこがね虫を包んで握りつぶそうとしていた。タマミの強い反対にあつて大きな手の力を緩めた。一瞬にしてつぶして捨てられるはずの小さなこがねむしが、私の手の平に戻った。

「んだよー、何でも取っておくから部屋が片付かないんじゃない。」

確かにそうだけと、宝物は宝物だ。タマミにとって、キッチンの片隅に昨日の朝ハルオに作つてあげた弁当に入れたおかずケースと同じ透明カップが目に入った。ころんとその中に虫を入れた。わずかに足を動かしたように見えた。なんだ、生きてるじゃんこいつ。タマミは強引に命を守つてやった自分をほめてやりたくなつた。人間なら一刻を争う救急外来だ。小学校二年生くらいのころ、学習机の上でもっと大きなこがねむしを飼つていた。蚊取り線香の箱のフタに空気穴を開けて、毎日学校から帰ると脱脂綿を取り替えて、水と砂糖を含ませた新しい綿を入れかえてやるのだ。何やかやで越冬して、そいつは一年近くも生きた。タマミの雑多な机の上でガサゴソと逞しく生きていた。時々、裁縫さいほうが得意な母から糸を貰つてかるく虫を飛ばしてみたりもした。

そんな経験があるのでたつた二センチ程のこがねむしを救つてやるのは容易だった。あれから五十年も経ているのに幼い頃の体験や経験は役に立つものである。今、タマミの部屋に脱脂綿は無い。思えば今は劇的に需要が少なくなっている気がする。古びた薬局にしか売つてないだろう。幼いころ母が生理の時はそれとなくわかった。一緒に風呂に入る時に母は黒い生理用パンツをはいて、股のマチの部分に長方形の脱脂綿をあてていたからだ。ひと月に一回やつてくる生理の前に母は理由わけなく怒りっぽくなつていたのを憶えている。脱脂綿はトイレの奥の物入れに常備してあつた。当時の生理用品はお粗末だった。

五十年を経て、それに代わるものを探す。一刻の猶予ゆうよも許されないのだ。わずかに動く虫を助けてあげなくては。油脂を吸ってくれる揚げ物シートを見つめる。不織布は片手で簡単にちぎれた。シンクの蛇口をひねり水を含ませぎゅっと絞る。水分を多めにした不織布に、砂糖をかけてやる。砂糖を入れたビンの中にはほんの少しコーヒーの粉が混じつていた。コーヒーはハルオしか飲まないが、コーヒーを入

れたスプーンで砂糖をすくうので多少混じっているのだ。なるだけそれをよけて、砂糖の部分指でつぶしてやる。素早く、透明ケースから虫をつまみ出し砂糖水をたっぷり吸った不織布の上に載せてあげた。たぶん虫にとっては超美味しいごちそうの付いた布団だ。それをケースにしきつめてやり、虫ごとそっと戻した。逃げてしまうのも悲しいので、アルミホイルでふたをする。空気穴はつまようじの先でプツプツと開けた。その時点では虫は元気が無くて足も二本くらいわずかに動くものの外側の羽も輝きを失いかけていたが、口元だけは強く白い不織布を吸っている。「ねえ見て見て、この子うれしそうに砂糖水を吸っているよ」

ハルオは今度は皿を洗いながら面倒くさそうに小さな細い目を向けた。ハルオは近ごろ、皿を洗う前に必ず呪文を唱えるみたいと言う。

「居候、三食目には皿洗い」

彼は当然の行為と思っっているみたいだ。

「ねえ、聞いている?」

「わかったよ。そいつはこがねむしなんかじゃないよ。フンコロガシとかいうつまらない虫だよ」

と、さっき言った事を繰り返した。もしかして、この人は冷たい人なのかしら、と思う。タマミの事もいつかひねりつぶして捨ててしまうのではないか、ふとそんな事を一瞬考える。

三歳年下で独身のハルオは多く自身の事を語るわけではないが折りにふれ、今まで付き合った女性の事や話に出てくる沢山の職種に、タマミはどうしても共感できない部分を感じていた。女性の数や仕事の数は年齢を考えればある程度は許せる。十七才の時の相手が、妊娠して子供を生んでしまい、遠い郷里しんりで、シングルマザーとして生きていること。三十代で付き合っていた彼女には中絶させたことがあるとか。それらの断片的な過去に男として問題を感じざるを得ない時があった。多少の不信感やミステリアスなところを感じつつもハルオと付き合い合って二年が過ぎようとしている。近所のラーメン屋で熱心に声をかけてきたのはハルオの方だ。タマミが、高校の美術教師をしていることを自慢の種にするのには訳があった。生き別れた娘も成長して郷里で教壇に立っているとのことだ。

「ちゃんと空気が入る様にしてやったかい？」

ハルオの声で我に帰る。

(おおつ、ハルオ、つまらぬ虫に愛をかける！ 愛が芽生<sup>め</sup>える！ と少し感動する)。  
「あつたりまえよ。あつたりマエダのクラッカーなんて憶えてる？ ちゃーんと忘れずにアルミホイルの上をプツプツ穴を開けたから、大丈夫よ」

翌日、月曜日になりハルオは朝早く出勤した。タマミの作った弁当を嬉しそうにカバンに入れて玄関先でキスをして出て行った。まるで同棲したてのカップルみたいに。ハルオがどんな仕事をしているのか詳しくは知らないが、ラフなカッターシャツにジーンズで出て行くのでホワイトカラーではない。新宿から下りの私鉄電車ですらに一時間以上はかかるらしい。

タマミはその年、月曜日が休みになっていた。私立校は研修日という名のシフト制がある。一人になってのんびりもうひと寝入りしたいところだ。夜中にハルオが寝ているのか起きているのか不明の状態なのに、タマミの胸や股間を触ったり、ついたり、手をつないだり、頭をなでたりするから、正直言って熟睡できてないのだ。うとうとしながらも太モモあたりにハルオの勃起したペニスを感じられた。

そのくせハルオは休みの日の昼間から寝てばかりいるので、

「どこが悪いんじゃない？」

というと、

「最近ほとんど熟睡できなくて、寝てないんだよね」と返ってきた。

(焼酎のオンザロックを寝酒に十時からのニュースもつけっぱなしで熟睡してたんじゃないの?)

とタマミは思う。

「中年になると寝つきが悪くなるのよね。夜中に起きちゃったりさ。仕方ないよ。」  
ハルオの身体は確実に三歳の差を追っている。

枕を並べているとハルオがいかに長身でも顔の高さは同じだ。酒臭い息を音をたてながら吐くので頭の位置をずらしたほどだ。飲んだ酒が芋焼酎だと手に負えない。寝ながら下の穴から放屁することもある。気付いていないから充分熟睡できているのではないかとタマミは思うのだけれど。

誰の干渉も無い月曜日、昨日のこがねむしをしてみる。子どもの夏休みなら『観察』する、という表現になるだろうか。こがねむしは、昨日より明らかに輝いてみえた。口元はすっかり砂糖水を吸って、というよりがちりと不織布に食いついている。そして六本の足が元気に動いている。カリカリ音を立てて外壁の透明プラスチックを元気良く蹴<sup>け</sup>っている。

(うわーっ、す、すごい。生きてたんだ。助けてやったから元気になったんだ)。

タマミは単純に嬉しかった。一步違えば、ハルオに紙の中で握り潰され、ブチツと音を立てて絶命していたかもしれないのだ。緑茶色のどろどろした液体をいっばい出して。

その夜、ハルオはまたやってきた。というか勤めから帰ってきた。九月に入ったというのにやたらと蒸し暑く、天気予報ではこのところ毎日高温注意報が出されている。風呂無しで、シャワーも簡単に浴びられないハルオの部屋を思うと、

「また来たのね」

と、むげな言葉を投げかけるのは残酷な事のように思えた。タマミがいつか捨てようとした肩かけカバンをハルオは大切に使っている。長いヒモに、ところどころ銀白色になった長髪をくぐらせカバンを取るとフーツと息を吐いた。

「早くシャワー浴びなよ。さっぱりするよ」

タマミの部屋も狭い1Kでたいした事はないが、トイレと風呂が一緒のユニットバスがあるだけ、まだマシである。シャワーを済ませると、気持ち良さそうに、まるで小学生の少年みたいに小さく縮こまったペニスにプルプル水をしたたらせながらキッチンに出てきた。タマミが渡した洗いたてのバスタオルでバサバサと白髪まじりの長髪を拭き水滴をまき散らしている。その度に小ぶりの尻が上下する。

わずらわしい反面、ハルオが又来てくれたことがなんとなく嬉しくて、あちこち綺麗になった石けんの香りのするハルオの唇<sup>くちびる</sup>に軽くキスをする。夜中の不快な芋焼酎の香りはしない。

「ねえ、ハルオちゃん、きのうのこがねむしね、元気になったの。みてみて、ほら、嬉しそうに砂糖水吸っているでしょ？ 私さ、死んでると思ってたの。死んでも絵に描いてみたいと思ったんだけどさ」

「そうか、元気になったのか。だったら逃がしてやれよ。こんな狭いカップで飼っ

てちゃかわいそうだよ」

と素っ裸のハルオが言った。

(に、逃がす!?) タマミには思ってもみない発想だ。そうか、虫にとっては最高の選択肢ではないか。

改めて虫を見る。元気よく足をバタつかせているこがねむしの白い布団に薄茶色の排泄物がたくさん付いている。いっぱい栄養を取って糞までして、安心して狭いカップの中で甘い汁を吸い続けている。たった一日でこんなに生き生きよみがえ蘇った小さな生き物の生命力の強さに圧倒される。あのまま玄関に放っておいたら確実に死んでいたはずの虫が元気に息を吹き返している。

そこへハルオの『逃がしてやれよ』の発想。元来この男は優しいのだろうか。タマミはたった一日であっても本棚の上で飼いはじめたこがねむしに愛いとしささえ芽生えてきつつあったのに……。

翌日ハルオは歩いて二十分程の自分のアパートに帰っていった。来週末は晴れそうだから、と釣つり竿ざおを取りに行く目的もあるらしい。先々週あたりに出かけた真鶴で大きめの鯛を釣ってから調子に乗って天狗になっている。タマミは本棚の上からプラケースを取り、こがねむしに問いかける様に言った。

「ここにずっと居たい？ それとも外に出たい？ もうすっかり元気になったもんね」

意を決してドアを開けてみる。一昨日、この虫はこの場所で、瀕死ひんじのところをタマミに助けられたのだ。捨てようとしたハルオから奪い返し守ってあげたのだ。しかし、ハルオが言うように、いつまでも狭いプラケースに入れておくのが幸せかどうかは疑問だ。

幸せとは言いがたいタマミの結婚生活は二十七年にも及んだが、相性の悪い夫と別れ都会の片隅の1Kで独り暮らしをして八年になる。気が付けば息子や娘もとつくに成人して、長男は二児の父親として立派にやっている。子どもや孫達にはおばあちゃんと呼ばれる年齢になってしまったが、タマミは普段、そんなことはすっかり忘れていた。ハルオという時は尚更、少年と少女みたいになれた。

過去を語りたがらないハルオではあるが、知り合った直後にタマミに教えてくれ

た事がある。地元の高専を卒業して入った会社は、誰もが知る大手の電機メーカーだ。十七、八歳での幼い失敗は、地方の小さな町では恰好の噂話になったに違いない。そこそこ当時は優秀だったらしいが、一年に満たず会社を辞めて家出同然で上京してきたようだ。幼いセックスのほんの一瞬が過ちとなって彼は一生十字架を背負って生きている。十字架はとおに錆づいていたとしても。

「ハルオちゃんもいつでも逃がしてあげるよ。去年よりずっと元気になったもの。顔色もいいし。充分甘い汁と栄養を吸ったものね。わたしのおっぱいも？　かな。この狭い1Kでね。あったかいふかふかのお布団でさ」

「ははあん、こいつ、ったくタマちゃんは悪い女だなあ。そういうことを言うんだあ」

昨夜の会話とこがねむしの運命が重なる。タマミはふざけて替え歌まで歌った。

「こがねむしいは金持ちだ。ハルオちゃんは小銭だけ〜♪」

「こんにゃろー」

とハルオが軽くタマミのおでこをつついた。

右手で扉を開けると、今日も太陽がきつくてまぶしい光と熱風が頬を撫でる。タマミが（逃がしてあげようか、どうしようか）と思った瞬間、外階段のフェンスに左肘がぶつかり、右手に持っていたプラケースが転がり落ちた。ケースは階下に住む大家の台所のヒサシに載った。さらに下の土の上には砂糖水を含んだ不織布が落ちていった。プラケースの住人（人ではないが）はブーンと羽を広げて、隣との境のブロック塀を越して隣家の庭の芙蓉の葉っぱに飛び乗った。白っぽい緑の葉にこがねむしのメタリックグリーンが小さく輝いている。うすピンク色をした芙蓉の花が、いくつも肉厚な花弁をぱっくりと開いていた。数秒後こがねむしは吸い込まれる様に花びらの中心に消えて入った。

逃がして良かった。きっと虫にとっては幸わせだったのだろう。翌朝、窓辺でカリカリと音を立てる虫の気配を感じた。タマミは敢えて窓を開けなかった。

（完）